レントより遅く

k鯛

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=9508867

カミュベロ, DQ11, ドラクエ11

ベロニカ姐さんがカミュ氏に告白するパターン。
ヘタレなカミュ氏と、やきもきする仲間たち。

細かいことは色々スルーしてくださいませ。

レントより遅く

「あのね、カミュ。あたしあんたのこと好きだわ。恋愛的な意味で」

　フォークに揚げ芋を突き刺したまま、天才魔法使い様が宣う。数秒を開けて仲間たちが奇妙な叫びを上げ、何故かハイタッチしだす。シルビアが踊り出し、マルティナが続く。
　カミュはまるでアストロンにでもかかったかのように、瞬き一つしなかった。ベロニカが手元の芋を口の中に片付けたのを見てから、ようやくそろりと手を動かす。
　まず取ったのはベロニカの使っていたコップだ。深い紫色の液体に鼻を近づける。

「お酒じゃないわよ」

　確かに酒精の匂いはない。甘ったるいぶどうジュースの匂いだ。次に指先で前髪を払った。女性陣（ハンサムな乙女含む）が黄色い声を上げたが、当人たちは淡々としたものだった。

「熱もないわ、健康よ」

　そしてロウを見る。木のうろを彷彿とさせるような表情に、ロウは安心させるような笑顔で頷く。

「魔法や呪いの類もかかってないぞい」

　最後に厨房の奥の壁にかかるカレンダーを見る。ベロニカは腕を組んで、フンと鼻息を荒くした。

「エイプリルフールでもないわ。いい加減失礼ね」
「だって、お前……」
「そうね、幼児よね、見た目は。でも中身はちゃんと16歳よ。ご存

知なかったかしら」
「いや、その、そうじゃなくて」
「邪神退治の大事な時期に、っていうのも理解できるわ。でもあたしのよく当たる勘が『今だ！行け！』と囁いたからには仕方ないのよ」
「そうじゃなくて！」

　会話の内容に反して、カミュにあいかわらず表情はなく、叫びは乾いて平坦だった。ベロニカも、騒いでいた面々も、じっと彼をを見る。カミュは視線を彷徨わせて二、三度口を開け閉めすると、ぐっと拳を握り込んで席を立った。

「悪い、先に休む」

　そして酒場の一角にはなんとも言えない沈黙が落ちた。ややあって、ベロニカが肩をすくめる。

「振られちゃったわね、まあ想定内だけど」
「お姉さま……」

　そして彼女が何事もなかったかのように残りの料理に手をつけたのを切っ掛けに、それぞれの食事が再開される。気のいい仲間たちは空気を読んで、今しがたの出来事には触れずに談笑する。だが、先程よりは少し静かだった。

「全く、ひよっこなんだから」

　カミュの出て行った扉をチラリと見て、ベロニカは呟いた。

　カミュとベロニカは仲がいい。これは勇者一行の面々にとって主観的、且つ客観的事実である。言い争いはするが、大体が内容はどうでもいいじゃれ合いだし、どれだけ喧嘩してようが馬の相乗りは

この組み合わせだ。戦闘中も息がぴったりで、イレブンに先陣を指名される事も多い。街の買い出しなども二人で回っているのを度々見かけるし、先日などカミュが(強化用ではない)アクセサリーを買ってやり、ベロニカは大いにご機嫌であった。これをして仲が良くないとは誰も言うわけがないのである。
　おまけに、仲間たちの誰よりも、二人でいる時は楽しそうだ。休息時に二人で話し込んでいる時は、皆そっと距離を置いて暖かく見守っている。むしろ恋人同士ではないと言うのが不思議なくらいだった。瑣末な見た目を気にかけるような狭量なものは居ない。

「上手くいく以外の道が見えかなったから油断してたわ」

　低く呟いたシルビアに、全員で頷く。賑わう朝市の一角に、武器や薬類を見終わった面々が集まっていた。その中でイレブンは困ったように眉を下げる。

「僕たちが騒いだから、カミュは意地になっちゃったのかなあ」
「どうじゃろうか、そのようにも見えなかったが……」
「そうですね、カミュが無表情だったのが気になります」

　マルティナが頬に手をやりながら、目を細めた。喧騒の向こうから、双子とカミュが歩いてくる。手には食料と、菓子の袋。そこへグレイグが合流し、新たな袋を開けて見せる。セーニャの様子からするに、また別の菓子だろう。あの巨漢の英雄も、割と甘味が得意だ。
　食料の調達に出ると名乗りを上げた双子に、着いて行くと言ったのは他ならぬカミュだった。自らの強化アクセサリーの選定をイレブンに頼んでまで。彼らの間で昨日の出来事がどう折り合いをつけられたのか、知るすべはない。ただ、いつもより早起きで一人食堂にいたカミュが、祈るように組んだ両手に額を付けてじっとしていたのを、イレブンは目撃している。

「干し肉が安かったから多めに買っておいたぜ。山登りは今日から

だったよな」
「ありがとう。素材集めはカミュが頼りだよ」
「任せろ」
「その割に、あんた盗むのにスカ多いわよね」
「んだよ、簡単に言いやがって。ドロップ待ちよりは効率いいだろ」
「盗賊（笑）」
「シメんぞ糞ガキ」

　表面上は、今までと何も変わらない。しかし、以前ならここでカミュがアイアンクローを繰り出した筈だが、睨むにとどまった。首をすくめて構えていたベロニカも、瞬きをするとフイと顔をそらした。それを見てイレブンはこっそりため息をついた。

　目当ての魔物を狩りつつ、一日目は無事に暮れ、山登りはつつがなく二日目に突入した。できれば今日中に素材を揃えて鍛治を済ませ、明日には街まで戻りたいのは全員共通の願いだ。気合を入れて進むも、木の根も奥へ行くにつれ巨大化していて歩きにくい。体格的ハンデの大きいベロニカは何度もよろめいたが、だが今回のカミュは一度も背負わなかった。代わりに肩車してやっているグレイグの頭上とその隣で、それでも会話だけはいつも通りに流れて行く。

「サボテンステーキって食べ応えあんだけど、なんでか物足りなくね？」
「それは仕方ないでしょ。あれは植物なんだから」
「は？動くだろ、動物じゃねーの」
「でもサボテンって植物でしょ？ね、グレイグさん」
「あ？ああ、確かに普通のサボテンは植物だな。だが、原料のゴールドサボテンが植物のサボテンかというと……わからんな」
「ほらみろ」
「なによ、わからないって言っただけでしょ」

その後もシルビア、セーニャ、マルティナと着々と巻き込まれ、「ゴールドサボテンは動物か植物か」という、至極どうでもよく、また決着のつけようもない大論争となる。舌戦の最中も皆戦闘はスムーズ、全くおかしな所はない。ベロニカとカミュが物理的に、微妙な距離を開けている以外は。
　最終的には、今度狩って捌いてみればわかるというところに落ち着いたものの、転生モンスターが出るまで狩る時間はあるのか？という疑問をロウが呈したところでキャンプ地にたどり着いた。本日はここまでだ。

　ベロニカが火種を作り、カミュが薪をくべていく。会話はホムラの里の竹細工の話に移行しながら、手は止まらない。手馴れたものだ。やり取りの中で、何かがベロニカの琴線にふれたようで、満面の笑みでカミュの袖を引いていた。自分たちの仕事の分担を全て終えた二人は笑い合いながら藪へ向かって行く。それを見送って、食事当番のイレブンは、人参を剥きながらロウを見た。慌てて隠したムフフ本は、話が逸れそうなので今は見なかった事にする。多少、気にはなる。

「馬に蹴られる、っていうのはわかるんだけどね」
「わかるか。成る程イレブンは幼馴染殿の教育が行き渡っておるのお」
「茶化さないでよ、おじいちゃん。僕は、あの二人には幸せになって欲しいんだ。勿論、みんなにもだけど……なんて言うか、特にね。カミュはさ、マヤちゃんの事もあったし」
「まあ、壮絶ではあるな。あの道を歩んで尚も歪まなかった心は、ワシも報われて欲しいとは思うぞ。だが、何を望むかは、人それぞれじゃろう」
「それなんだけどさ、カミュはベロニカを振った訳じゃないと思うんだよ」
「ほう。根拠はなんじゃ？」

　今ではエマよりは確実に上達してしまった料理の手際だ。あっと

いう間に剥き終わった野菜を放り込みながら、イレブンは先をどう続けるか迷う。

「か、勘、かな。相棒だし」

　苦しい言い様にロウが笑う。きっと分かっているような声音で。
　カミュが酒場から出ようと踵を返した時、すぐ隣に座っていたイレブンは見てしまったのだ。泣き出すかのような、絶望した表情を。そして、朝にベロニカがいつも通りの挨拶をした時、安堵に綻んだのを。

「多分離れたくないのは、カミュの方じゃないかな。関係が変わらないように、懸命に間合いを測ってるみたいに見える」

　イレブンはカミュとベロニカが歩いて行った方をチラリと見て、鍋をかき混ぜた。ロウは、フムと一人頷くと、本を取り出した。ムフフ本ではなく、布張りの学術書だ。「心理学」とある。

「人は誰しも体の成長に合わせて、心にも変化と乗り越えるべき課題にぶつかる。勿論、理想は理想じゃ。個人差や、どうしようもない環境もあるじゃろう。じゃが、対人関係というものは、どう生きようとある程度付いて回る。それを上手く成長できていないとなると、苦労はするんじゃろう」

　パラパラと捲り、栞の挟まった所で止まる。ベロニカがロウへとプレゼントした栞だ。「いくら楽だからって、テントで寝転がって読むと目が悪くなるわよ」と言うお小言付きで。そんな彼女は聞く限り、恵まれた環境で成長してきたように見受けられる。表裏のない、さっぱりとした物言いに、それが現れている。

「恋愛、と一緒くたに言われれど、恋とは本能からくる『衝動』であるが、愛は理をもって届ける『表現』じゃ。愛は与えるも受け取るも、相手と同等の学びが要る。友愛ならまだしも、恋と折り合いをつけるような愛に関しては、あやつが学ぶ機会を満足に持てた

か、というと……難しかったろうなあ」
「僕は何もできないのかな」
「そうさな。まあ、奴が求める時、話を聞いてやれればよかろう。そしておぬしが思ったことを、素直に伝えておやり」

　もどかしく唇を噛むイレブンを、ロウは穏やかに見つめた。

　ウキウキと手元を眺めていたベロニカはいつのまにか船を漕ぎ、パタリとカミュの膝の上で眠ってしまった。びくりと一度肩を震わせたカミュは、だがそのまま小さな竹のかけらを削り続けた。シルビアが赤い帽子を外して毛布をかけ、テントへと向かう。残ったのは夜警担当のイレブンだった。

「竹とんぼ、だっけ。それ」
「おう。ホムラでガキどもが遊んでたんだけど、めっちゃ飛ぶぞ。ちゃんと出来ればな」
「できるの？」
「初めて作るし、わからん」

　ナイフ捌きには当然危なげはないが、何度も角度を見直して慎重に削っているのがわかる。完成形を見たことがないイレブンは、再びカミュの手元に見入る。

「ベロニカのリクエスト？」
「あ、ああ。話の成り行きで。こいつ、事あるごとに自分はレディだなんだってうるさいが、なんだかんだでガキっぽいよな。外見に引きずられてんのか、元々なのか知らねえけど」
「ベロニカは、レディだよ。君も知ってるだろ」

　笑いあって歩く、先刻の二人を思い出しながらイレブンがそう言うと、カミュの手が少しの間止まった。そして口の端を少しだけ歪めて笑ったような表情を作って、また作業を再開する。

「……なあ、イレブン。これがレディだとして、どうするのが正しいんだろうな」
「正しい、かあ」

　ぼんやりと力なく問うカミュを見て、イレブンの脳裏に先程のロウの言葉が蘇った。素直な気持ちを伝えるには、あまり語彙が豊かでないことは自覚していたので、一度目を閉じてゆっくりと言葉を組み立てた。

「僕はね、世界を回ってみて、思ったんだ。人間って、本当にたくさんいるんだなあ、それなのに一人として同じ人はいないんだなあ、すごいなぁ、って」

　夢見るように語りだしたイレブンを、カミュは手を止めてじっと見つめた。この目がキラキラと瞬く時、何か大事な言葉を、勇者はカミュにくれる。頷いて先を促す。

「同じ人はいないんだから、『正しい』もきっと同じじゃないんだろう。一人の人の中でも、時間で変わったりするしね。だからね、『正しい』って、一つだけに決めつけてしまったら、正しくなくなっちゃうんじゃないかなあ。……僕はカミュもベロニカも大事だから、二人が居心地がいい距離を見つけるまで、いろんな可能性を考えてみてほしいな、って思うんだ」

　それを聞いてカミュは「可能性」とおうむ返しをする。それから短くため息をついた。形になりつつある竹とんぼを、くるくる回し見ながら仕上げを施していく。

「上手くやりたいなら、ある程度のソツのない立ち回りのできる距離が要る。踏み込みすぎると碌なことがなかった」
「カミュにとって、それは僕らもそうなの？」
「いや、お前らは……その、友人って、枠だろ。だけど恋というやつだけは、駄目だ。……ずっとは居られないから」

今度は、イレブンが「ずっとは居られない」とおうむ返しをする。なにかを振り切るような声で、カミュは顔を上げた。

「だから、これしかないんだ」

恐らく完成した竹とんぼをその場に置いて、カミュは力の抜け切った、小さな体を毛布ごとそっと持ち上げる。丁寧な足取りでテントへと、音も立てずに入っていった。それを見送ると、グレイグと夜警を交代するまで、イレブンは一人でじっと焚き火を見つめた。

青みも鮮やかな竹とんぼが、早朝の空を舞う。はち切れんばかりの笑顔でそれを目で追うベロニカとはしゃぐシルビア達から少し離れて、カミュが大欠伸をしていた。イレブンはこつりと肘を入れる。

「大丈夫、寝不足？眠くて戦闘中にミスったりしないでくれよ」
「んなヘマしねぇわ」
「どうだろうね。まあ、今日欲しい素材はそんなに多くないけど。無理せずよろしくね、相棒」
「おう」

風に流される竹とんぼを追うベロニカの姿は、おおよそ見た目の年齢そのものの微笑ましいものだ。つんのめりながら辛くも捕まえた竹とんぼを、カミュを呼んで得意げに掲げてみせる。面倒そうな仕草で手を上げて応えたカミュの、その横顔をイレブンは盗み見る。それは多分、「友人」を見る目からは逸脱していると、イレブンは思った。

気力はあっても、疲労は溜まる。それを解消すべく、ネルセンの試練をまずは一通り終えた面々も、この3日は流石に休養日となっ

た。狩りに狩った魔物に、集めたトレジャーを換金して懐に余裕のある一行は、ソルティコの宿屋に荷物を下ろした。

「ホムラの蒸し風呂も捨て難かったんじゃが。——ほれ、足はこう組むんじゃよ、カミュ」
「あ、こうか。——そうは言ってもそれ以外何もねえだろ、あの村。退屈で死ぬ」
「鍛治が！あるじゃないか！」
「お前ほんと好きだな」
「後はこの時期だと、少々湿度が厳しいですな」

　高難易度かつ物量のある試練に、切実なる筋肉疲労を抱えた物理攻撃担当達は、格闘家によるストレッチ講座を受けるべく集まった。この3人部屋は、いつも泊まる部屋より少し広い。グレイグ込みの男4人でも、なんとか圧迫感を感じずに済んでいる。グレードではなく、単に間取りの都合らしい。

「女性たちは買い物かのう？」
「そう言ってたけど、セーニャがいるからスイーツ食べ歩きをしてないはずはないね」
「オッサンも行けばよかったのに。好きだろ、甘いもん」
「確かに好むが、あの量は流石に付き合いきれん」

　背中をロウに押しこまれながら、グレイグは渋い顔をした。全員の脳裏に、クリームたっぷりの焼き菓子を大量に抱えたセーニャが浮かび、げんなりとした苦笑いが溢れる。甘いものに関する彼女の消化能力は、若干人間離れしている。
　黙々と体の筋をほぐすことに専念していると、軽い足音が一つ、階段を登ってドアの前で止まった。カミュが扉を開けると、予想通りの赤い帽子が大きな紙袋の向こうから覗いていて、イレブンは目を瞬かせた。

「ベロニカどうしたの、その大きな袋」

「……セーニャのオススメの配達よ。特にグレイグさんの感想が聞きたいらしいわ。セーニャから伝言、『スイーツトークしましょう』ですって。あとはあたしの戦利品」

　大きな紙袋から、花柄の紙袋を取り出してグレイグに押し付けると、厳つい顔が少しだけ緩む。ベロニカはそれを見てニコリと笑うと、もう一つの袋をロウに手渡す。

「海苔せんべいじゃな」
「甘いもの食べたらしょっぱいものよねー。あたしは唐辛子せんべいだけど、おじいちゃん、半分ずつにする？」
「お、ええのう」
「なー、俺らの分は」

　ベロニカがいそいそとロウとせんべいの袋の中身を分けていると、カミュが勝手に袋を漁り始めた。ベロニカは呆れた顔でため息をつく。

「あんたたちはその緑の袋」
「なんだこれ」
「塩クッキー」
「ゲテモノかよ」
「なに言ってんの美味しいわよ。あんたたち甘いのも得意じゃないし、辛いのも好きじゃないんでしょ。中間だからちょうど良いわ」

　中身を覗いて怪訝な顔をしたカミュが、そう言えば、と続けた。

「お前一人で戻ってきたのか」
「実質一週間甘い物断ちしたセーニャに、子供の胃袋が付き合えると思ってんの」
「アネサマ達は？」
「力続く限りは着いていくって。流石武闘派よね」

　そして軽くなった袋をひったくって「じゃあね」と出て行くの

を、カミュが「もっと美味いものはねえのか」と文句を言いながら追いかけて行った。

「カミュのやつ。ストレッチ、途中なのにね」
「まあ、より癒される方がええじゃろ」

　イレブンとロウが顔を見合わせてニヤリと笑うが、グレイグは憮然として顎に手をやった。二人が出て行った扉を見やってから、ボソリと言う。

「私には、カミュが不誠実なように感じます」

　それに対して二人はもう一度顔を見合わせる。血縁らしい、よく似た苦笑いを浮かべた。

「それは誰も反論ないと思うよ。本人も含めてね」
「そうは言うても、当事者のベロニカが良しとしているのだから、仕方なかろう」

　もうひと仕上げ、とばかりにロウが背を押し込むと、イレブンの潰れたうめき声が上がった。日頃からもう少し多めに柔軟運動をしなさい、と指導が入る。

「あやつらにはあやつらなりの歩幅というもんがある。他人のワシらは冷たいようでも、そこに手を貸すことはできない。だから、口出しもナシじゃよ、無粋じゃからの」
「しかし、これではベロニカがあまりにも……」
「かわいそう、か？ワシはそうは思わんがな」

　ロウはせんべいの袋を取り上げると、ポンと宙に放った。片手で受け止め、テーブルにそっと置く。

「軽率におなごを弱きものと思わぬことじゃ。我々おのこが勝てるのは、せいぜいが腕力くらいなもんじゃよ」

グレイグが複雑そうな顔をしたと同時に、勢いよく扉が開き、カミュが走りこんでくる。窓際のベッドに顔を突っ伏すと、奇声をあげて頭を抱えた。耳が妙に赤い。
　イレブンはベロニカの居る部屋の方の壁とカミュを交互に見た。相棒氏は「あいつ絶対レディなんかじゃねえ」とぶつぶつ唱えているので、大体を把握する。

「君、おおかたキスでもされてきたね？」

　カミュはガタリとベッドの枠に膝をぶつけた。ほれみたことか、とロウはグレイグに視線をやって髭をしごいた。

　今日覗いた雑貨屋で、良い化粧水が手に入ったとご機嫌のシルビアが、勢いに任せてカミュまでパックしようとしてきたので慌てて部屋を逃げ出した。一瞬イレブン達の部屋に逃げ込もうかと考えたが、昼間の今では危ないと脳内会議で却下したカミュは廊下を出て、宿のバルコニーの欄干にもたれた。海の音が近い。そのまま星空を見上げる。
　夏と冬では冬のほうが天体観測に向いているとは言われるが、マニアでもない素人が見上げるならどんな季節でも大差はない。ただ航海の基礎として叩き込まれたいくつかの星を知った上で見るならば、夜の空もいくつかの模様を描き出し、暇つぶしには悪くない。知るから愛するのだ、というのは誰が言っていたか。知り得たことに意味を付けて執着するのは、社会集団を形成する動物のサガなのだそうだ。

「あら、先客ね」

　建て付けの悪い扉を軋ませて現れたのはベロニカだった。なんとなく来るような予感がしていたカミュは驚かなかった。

「寝てろよ、ガキ」
「まだ眠くないんですもの」
「あっそ」

　そしてさも当然とばかりにカミュの足の間に腰を下ろした。セーニャの図らいか、ストールは羽織ってきているものの、薄手の夜着が寒々しいのに変わりはない。カミュにならって空を見上げるので、洗いざらしの金髪が風にふわりと乗った。

「なあ」
「なによ」
「なんであんなこと言ったんだ」
「あんなこと、って？」
「はぐらかすな」

　カミュがようやく知ることができたのは、深い友情だった。背を預ける安心感だった。それはきっとこの旅の果てよりも、その更に先まで続いていくと、信じられる心だった。温かく照れくさく、大切にしたい絆だった。それではこの娘は納得してくれないのか。
　「恋」は、もしくは恋に似たものは、既に知っていた。知ってはいたが、愛せるものではなかった。何度か目の前に現れて、すぐに消えて行ってしまった、そら寒いものだ。それによって相対したものの関係を断ち切るだけの、忌むべきものだった。だから、ベロニカが「恋」を持ち出してきた事が、許せない。流されてなるものか、とカミュは腹に力を入れた。

「納得できねえんだよ、お前の行動が。急にも程がある」
「理由を言えば、あんたはあたしのこと好きだって言ってくれんの」
「そういう話じゃねえだろ」
「なら言わない」

　舌打ちをしたカミュの足に、ますますベロニカは身を埋めた。寒

いのだろう。だが、部屋に帰れとは、カミュは言わなかった。

「おまけにさっき。キスしやがって」
「問題あるの？」
「大アリだ馬鹿」
「初めてでもないんでしょうが」
「ねえよ」
「あたしは初めてだったわ」
「……馬鹿が」

　ここの所大人しくしていたからカミュは油断をしていた。なんの脈絡もなかった。ベロニカが開いた新しい本を、その後ろから覗き込んだ時だった。ふと振り返ると、当たり前のようにカミュの両頬を小さな手で包み込み、目を閉じて唇を合わせてきた。
　事態を理解した後の記憶は飛び飛びだ。ベロニカの部屋を出るまでは無表情を貫けた筈だが、ベロニカがどんな顔をしていたかは覚えていない。イレブンに大層呆れた目を寄越された覚えはある。立場、年齢、経験と、どれに照らし合わせても大失態だ。小娘に完全に振り回されている。目元を揉みほぐしてみた。頭が痛い。
　しばらくじっとしていたベロニカは立ち上がり、カミュを振り返った。強い視線だ。寒さで少し色を無くした唇が動く。カミュに嫌な予感が過り、慌てて口を塞ごうと手を伸ばしたが、間に合わなかった。

「じゃあ、やり直しさせてあげる」

　もはやカミュは反論を発声するのも面倒になってきた。力なく空を切った左手が、ベロニカに捕まる。カミュは眉をひそめて首を振り、ベロニカが不満そうに頬を膨らませる。空いている手で額をはたいてやれば、文句と罵詈雑言の中間の憎まれ口が飛び出してきた。そのまま振り払い、後ろ襟を掴んで引きずる。

「い・く・じ・な・し」

「どーとでも言いやがれ」

　室内まで戻って手を離したカミュの足を踏みつけついでに、ベロニカが地団駄を踏んだ。子供の体重で攻撃されたところで痛くはない。しばらく踏んでいたかと思われたが、少々息を切らせてベロニカは睨んできた。

「何を示せば納得するのよ」
「知らねぇよ」
「あたしが信じられないの！？」
「信じてるさ、友達だからな」

　絶句したベロニカの頭を撫でる。帽子を被っていない今はいつもと違って、柔らかい髪の感触がした。

「酒飲んでくるわ」

　顔を見ないようにして踵を返し、カミュは階段を降りていった。この時間なら、まだ酒場は開いているはずだった。
　宿屋の扉を押して外に出る、なんとなく振り返ってみた。流石に着いてくるような気配はなかった。それを少しだけだが寂しいと、一瞬思いかけた自分を、気のせいだと決めつけて、カミュは闇の中へと歩みを進めた。

　不揃いな肉の、比較的大きい方を頬張りながら、イレブンが唸っている。キッシュを切り分けていたセーニャが手を止めて首を傾げた。

「もう、ないよね。やり残したこと」

　挑める試練は全て挑んだ。学べる技は全て習得した。作れる武器も全て作った。その上ニズゼルファがここ1週間ほど禍々しい気配を濃くし、立ち寄る街や村でも体調を崩す人が増えているようだった。仲間たちが緊張した面持ちをしたのは、だが一瞬だった。肉を

咀嚼し終えたイレブンが、スープに手を付けたからだった。小さく「あ、この味は今度真似しよう」などと言っている。
　だから各々食事を再開した。吐き気が酷い、と青い顔をしていた女将さんを、セーニャが治療してやったお礼として出されたフルーツ盛り合わせまで、各々しっかり堪能してからカトラリーを置く。

「うん、大丈夫だね。油断しないで挑めば、僕らのほうが強い」

　満腹だと何かが違うのか、その辺の加減は勇者でないとわからないが、彼が大丈夫だと言うならば、仲間たちにそれを疑う余地はない。気を引き締めて頷いた面々に、イレブンは笑う。

「いつもの素材集めの時とあんまり変わらないよ。でもちょっと頑丈そうだから、体力は十分に。よく疲れはとっておいてね」

　荷物整理しなきゃ、などと言いながら席を立つイレブンに、気合入らないじゃないの、と文句を言うベロニカと、ニコニコ笑顔のセーニャが続いた。残った者たちは、温い笑顔で顔を見合わせ、「もう一杯だけ」と酒の追加を注文した。

　向かいのベッドで読書をするグレイグを見れば、カミュは奇妙な感覚を覚えた。旅の最後にこの人物と同室になったのは、イレブンの差し金だろうか。何も考えずに適当に割り振った気もするが。

「あの頃、鉄格子越しでなく、あんたと同じ部屋にいられる事になるとは、夢にも思ってなかったぜ」

　本から顔を上げたグレイグは、苦笑いをする。彼にも悔いる事がある。懺悔する者同士の夜だ。カミュは道具袋から酒瓶を取り出した。既に大分減ってはいるものの、グレイグは呆れた顔をする。

「さっきだって飲んだだろう」

「あんなの、舐めた程度の量じゃねえか、薄いし。あんただって物足りないクチだろ」
「いや、まあ……」
「アレだ。荷物整理、荷物整理」

　あからさまにでっち上げられた理由を聞いて、グレイグはもう一度苦笑いを浮かべた。これで共犯である。

　特段共通の話題があるわけでもない二人は黙ったまま、手酌でそれぞれ勝手に杯を干していく。甘ったるい砂糖菓子をアテにする飲み方などカミュはした事がなかったが、合わなくもないな、と思った。まだまだ発見はあるものだ。

「最近、酒に味がするんだって気づいた」
「わからないで飲んでたのか」
「どれも同じに思ってた、けど産地とか樽？とか、なんか色々違うのな。あと値段が張るとたしかに美味い」
「はは、大人になったのではないか？」
「そうかね、自分じゃ何も変わったように思えねーんだけど」
「この旅を乗り越えてきたんだろう。変わるさ」

　グレイグはカミュを見る。太々しくも王家の財宝を盗み出したコソ泥。勇者を助け、妹を思い続けた兄。目を閉じてとある書類を思い起こした。

「以前、お前の調書を読んだ」
「そりゃお目汚しで」
「……半分……いや、重罪に関してのみなら、オーブ以外はお前の責ではないな」

　カミュは肯定も否定もせずに肩をすくめた。もう一つ、砂糖菓子を口に入れる。舌の上で溶ける瞬間、かすかに冷たい。

「お節介かもしれねえけど、アテの礼に。下層地域担当の衛兵、階

級4か5ってあたりだ」
「承知した」
「あんたも大変だな。邪神の始末の後は身内の不始末かい」
「それもまた俺の仕事だ。英雄などと持ち上げてもらったところで、城に戻れば悩める中間管理職だ」
「うわあ、すごいつらそう」

　面白そうに棒読みで言うカミュに、グレイグはついに声を立てて笑った。

「平和なればこそだ」

　そこで途切れた会話は、瓶の中身がなくなるまで戻ってこなかった。テーブルの上を片付け、それぞれのベッドに入った所で、グレイグが少し言いにくそうな調子で口を開いた。

「ロウ様には『無粋だ』と言われるかもしれんが……どうせ姫様にもつまらぬと言われたこともあるしな、この際一人くらいはいいだろう」
「何がだ？」
「カミュよ、ベロニカの事はいいのか？」

　壁を向いたまま、まさかの人物からの指摘に、カミュは返答をあぐねる。もそりと毛布を引き上げて、鼻先を埋めた。最後だから、そして意外すぎたこの人物だから、少し口が緩んだ。

「友達、じゃあ、ダメなのか」
「駄目ではないが、お前たちのその気持ちは、それだけではないだろう」
「友達なら、ずっと居られるのに？」
「恋人でもずっと居ればいいではないか」
「いられねーよ」

　きっぱりと、カミュが言う。その声音が随分と硬かったので、グ

レイグは隣を見る。月明かりに照らされた背中は、じっとしていると大分小さい。恵まれなかった少年時代と聞いた。守られて育った自分たちと違い、満足には成長できなかったのだろう。

「だって、恋はいつか飽きるだろ。飽きたら、会うのも嫌になるんだろ。平和になったらあいつはどこでもいけるんだ。俺と違って地位も才能も、学もある。恋にしちまって友達じゃなくなったら、いつかあいつに『会いたくない』って言われた時、もう俺は、追いかけていけない」

　聞こえた声だけは、いつものように平坦で乾いていた。だが、グレイグはその見えない顔が、きっと複雑に歪んでいるのだろうと思った。語られたそれは、経験から得た解なのだろうか。
　いつか不誠実だと感じたのは間違いだったと、グレイグは心の中でカミュに詫びた。彼は誠実に必死に、彼女と共にある未来を探していた。そして、そのことにベロニカは気づいていたからこそ、彼の葛藤を良しとし、待ち続けているのだ。
　グレイグはベッドに収まりきらない足を少し折り曲げて、壁を向いて横になった。

「どんな者同士でも、相手が本当のところ自分をどのように思っているかは、意外と伝わらないものだ。どれだけ共にあったとしてもな」

　そして首元のペンダントを静かに撫でる。それはあの日から２つになった。

「これは俺の独り言だ。寝物語代わりに聞き流してくれればいい。……友人とは得難く大切なものだが、皆同じように慈しむだろう。肩入れする順序は多少変わるかもしれないが、信頼は等しいだろう。だがな、特別だと――恋愛かどうかは置いておくにしても、『お前は皆よりももっと得難いのだ』と、伝えることは価値あるものだと、俺は思う」

グレイグは運の良い男であった。故郷は無くなってしまったが、生き延びてデルカダールに拾ってもらえた。兵士としてのし上がるに見合った才能を持っていた。苦なく他人に好かれる性格をしていた。それらはたしかに有難い事だ。だが、その運の良さを全て並べたところで、ホメロスと親友であれた事の幸運には比べるべくもない。比べられなかった、と言ってやれればよかった。

「心の内が伝わるには、心が近くにあらねば無理だ。心理的にも、物理的にもな。伝えることができる距離にいる事、それ自体が奇跡のようなものなんだ。俺はふいにしてしまったが」

　グレイグは長くゆったりと息をついて、目を閉じた。

「ベロニカに『皆よりお前が得難い』と言ってやれるのは、お前だけなのだなあ、と思うとな……差し出がましい事を言ったな、すまない」
「……独り言なんだろ」
「ああ、独り言だ」
「そろそろ寝ねーとな」
「ああ、そうだな」

　そうして静寂が訪れ流れ、夜が大分深くなった頃にカミュがそっと起き出した。やはり余計な事を言ってしまったな、と小さく笑って、グレイグはまた眠りの中に沈んでいった。

　なんとなく、居るような気はした。思えばずっとそうだった。面白いものを見つけた時、困って助けが必要な時、悔しさに打ちひしがれる時、何故かタイミングよくお互いが近くに居た。だから喧嘩も笑いも絶えたことがなかった。

「緊張して眠れねーか、おチビちゃん」

「そっくりそのままお返しするわ、ひよっこちゃん」

　3階のはしごは、夕食時の話で飛んでしまい教え損ねてたが、ベロニカは自分で見つけていたようだ。長居をするつもりか、いつから居るのかはわからないが、いつもの赤いワンピースで屋根の上に座っている。視線の先を辿れば、どす黒い星が浮かんでいた。カミュは彼女の背のすぐ後ろに立った。

「緊張、とはちょっと違うんだけど、眠るのがもったいない気がして。だって、明日には旅が終わってしまうわ。ふふ、なんだかおかしいわね。結構ひどい目にあって来たのに」
「悪魔の子の一味に始まって、虹色の枝もオーブもなかなか手に入らねえし、ウルノーガは王様乗っ取ってるし、いきなり出てきたと思ったら強ぇし、こっち瀕死だし」
「何とか倒せばいきなり邪神でしょ。なんなのかしらね、命の大樹は勇者を地上に遣わしてくれたけど、一介の人間に色々やらせすぎじゃない？」
「勇者を語り継ぐ聖地の巫女さんの発言とは思えねえが」
「あたしはラムダの巫女ではあるけど、イレブンの友人という自負もあるわ」
「だな、異論はねぇよ。みんな揃って働きすぎだ」
「でも、まあ。楽しかった、かしら」
「疑問系か」
「全部ではないもの。つらいこともあったから……そうね、『愛おしい』だわ。早く両親の元へ帰って安心させたい、ラムダの皆と勉強したりお祈りしたい、って思うけど、それよりも今がもう少しだけ大事。皆と居ることを手放すのが惜しいのよ。嫌なことも悔しいことも、全部含めて、この日々は愛おしいものだわ」

　ベロニカは穏やかにそう言う。二人はじっと空を見つめたまま話していた。カミュはその視線を星から彼女の背へと下げる。それは折れそうに薄く細いのに、折れたことは一度もなかった。
　カミュはそっとしゃがんで、後ろから小さな体を引き寄せた。び

くりと震えた肩は冷たい。子供の体温は高いはずだが、これでは風邪をひきはしまいか。夜風から守るように抱き込む。

「心が伝わるには、近くに居ないと駄目なんだ、ってグレイグのオッサンが言ってた」
「道理ね。手紙もあるけど、相手の目を見て言うに勝るものはないわ」
「……まだ、目を見て言うには、迷ってる」
「ひよっこ」

　ベロニカはため息をついて、背中に体重を預けた。だが、いつもお互いが近くに居たから、気がついた。その体温が彼にしてはやけに高いことも、鼓動が随分と速いことも。まったくもってその通り。近くにいれば、心は伝わるものなのだ。抑えきれず、クスクスと笑い出す。

「んだよ、ベロニカ」

　不機嫌な声でもこちらを覗き込まないのは、きっと顔が赤い自覚があるからだろう、とベロニカは推察する。カミュは笑い続けるベロニカに文句を言いながらも、彼女を抱えたその手は解かなかった。
　笑いが収まると、カミュを促して立ち上がる。ベロニカは情けとばかりに顔を見ることはせず、その右手を繋いだ。

「ちゃんと伝わったから、キスのやり直し、させてあげるわ」

　たっぷりと悩んだ間が空いて膝がつかれて、彼の利き手がベロニカの顎を滑った。唇だと辛うじてわかる程度に頬をかすめさせると、そのまま乱暴に手を引いて歩き出す。
　おあつらえ向きに今日は満月だ。後ろから着いていくベロニカには、赤い耳がしかと見える。あのやたら滅多女の子に声をかけられては面倒そうにあしらってるカミュが、キスをするのが初めてでは

ないと言っていたカミュが、高々頬にキスをしただけでこんな反応をするなんて、すこぶる気分が良かった。

「しょうがないわね、もうちょっと待ってあげるわ、ひよっこちゃん。どんな未来が来てもずっと近くに居てあげるから、決心がついたら好きだって言いなさいよね！」

　返事はなかったが気分が良かったから、今日のところは大人しく自室に帰って眠ることにしたのだった。

「ねえ、ベロニカ。カミュに告白したのって、なんであの時だったの？」

　宿に併設された食堂、「田舎者の朝」とからかわれる早起き二人組がテーブルで朝食を採っていた。デザートについてきたリンゴをニコニコと頬張るベロニカに、少し首を傾げながらイレブンが尋ねる。昨日、ようやく風呂を借りることができたからだろう、決戦の日に、いつもに増して綺麗な髪がサラリと揺れた。

「なんで、ねえ。うーん、死ぬこともあり得るって、実感を持って理解したから、かしら」

　物騒な一言に、だがイレブンの表情は変わらなかった。ただ、わずかに肩の力が抜ける。

「やれることはやれるうちに。負けるつもりはさらさらないけど、何があるかわからないわ。後悔は先に立ってはくれないもの。だか

らあんたも、ニズゼルファに挑むのに、これだけ色々手を尽くしたんでしょ」

　当たり前のように言うベロニカはいつもの子供の姿だが、その聡明さはいつの時も子供ではあり得なかった。イレブンにはよくわかっていた、始めに理解してくれるならば、きっとベロニカだろうと。納得した面持ちで頷くと、嬉しそうに、そして泣き出しそうに笑った。

「苦労かけたわね、イレブン。ありがと」

＊＊＊＊＊

　薄れゆく存在をどうにかかき集めて、ベロニカの魂は静寂の森の木の根元にしがみついていた。だが、それもようやく終わることができる。この世で一番信頼する妹が来てくれた。これで自分の仕事は全て終われる。悲しい思いをさせてしまうのは偲びないが、後悔はない。自分の最善を尽くせたと自負している。
　セーニャの指がベロニカの魂に触れ、その力を受けとる。安堵と共に見渡した仲間たちの顔に、一つベロニカを引き止めたものがあった。霧散していく自我の中、捉えたのはその人の心の中の叫びだった。

　なんで、まだ、おれは、なにもつたえてない

　もはや無いはずの胸が引きしぼられる。知っていたが閉じ込めていた、彼の、自分の中にあった感情はこの時、行き場を永遠に無くした。
　後悔なんて、無いわけがなかった。生きていたかったのだ。それが叶わないなら、せめて。

ベロニカは目を開ける。右手には芋の刺さったフォーク。瞬きの間に見た光景とは真逆の、平和な食事風景。笑顔の仲間たち。
　今なら間に合う。これから先、何が起こる運命だったとしても、今このときならば絶対に。……そうだ。せめて、伝えておかなければ。ベロニカは震える喉を叱咤して、深く息を吸った。

「あのね、カミュ。あたしあんたのこと好きだわ。恋愛的な意味で」